ー認め支え合う学級の実現に向けてー

支持的風土の醸成された学級づくりのためのハンドブック

令和４年３月

広島市教育委員会

目　次

学級における「支持的風土」とは
P. 2

支持的風土の醸成された学級づくりのために
P. 3

学級経営の計画と その実践の評価・改善
P. 4

学　級　活　動
P. 6

① 学級開き（年度初め） P.6
② 学 級 目 標 P.8
③ ル ー ル づ く り P.9
④ 係 ・ 委 員 P.11
⑤ 班 編 成 ・ 班 活 動 P.12
⑥ そ の 他 P.13

教 室 環 境 づ く り
P. 14

① 「シンプル」で「わかりやすい」教室環境づくり P.14
② 「ねらい」がわかり「全員」が大切にされている
教室環境づくり P.18

保 護 者 と の 連 携
P. 21

① 学 級 懇 談 会 P.21
② 家 庭 訪 問 P.22

学級における「支持的風土」とは

学級における「支持的風土」とは

児童生徒がお互いの個性（能力、性格、趣向など）や
考え方、表現の仕方などを

▼

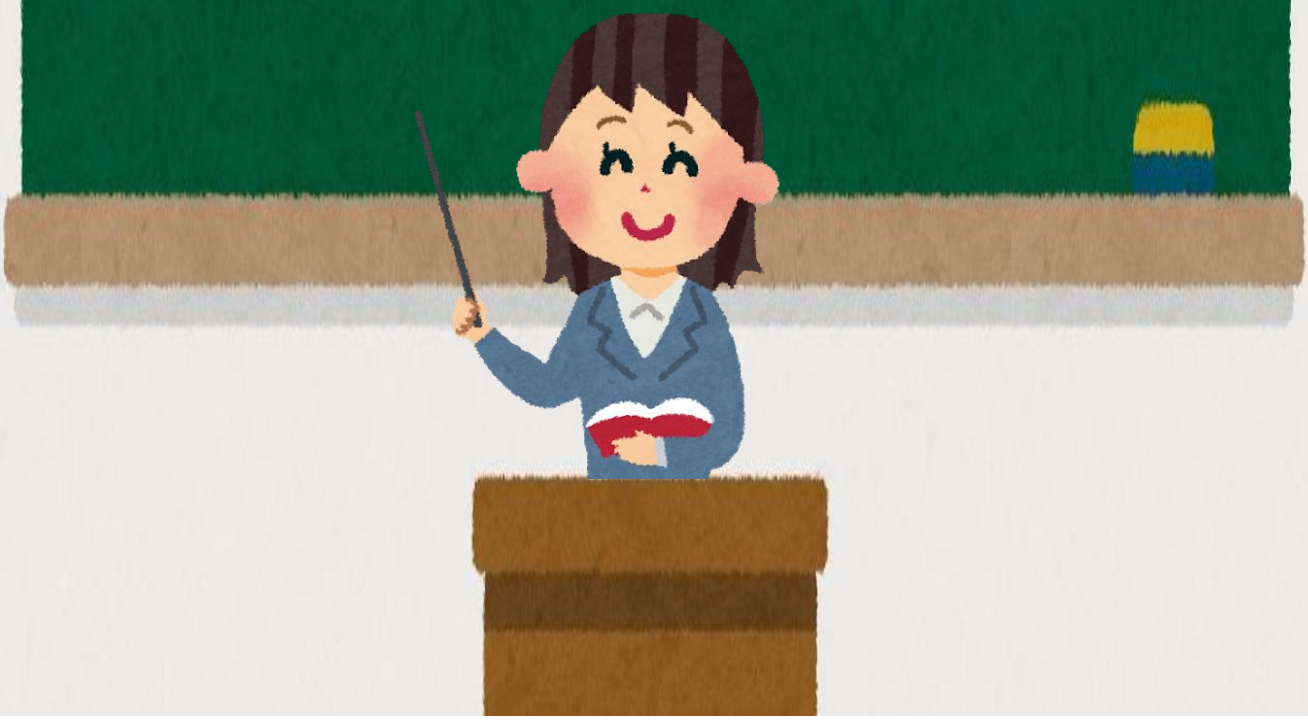
「認め合う」ことにより、
自己の存在感を実感することができるとともに、

お互いに長所（得意）を生かして協力したり
短所（苦手）を補ったり、
また、時には不安や悩みに寄り添ったりして

▼

「支え合う」ことにより、
安心して過ごすことができる、

そんな人間関係のある環境のことです。



支持的風土の醸成された学級づくりのために

前述のような、「一人ひとりの児童生徒にとって、自己の存在感を実感することができ、安心して過ごすことができる」支持的風土の醸成された学級づくりを行うためには、まず、教師が、児童生徒一人ひとりへの理解を深めるために寄り添い、良好な人間関係を築くことが重要です。

さらに、児童生徒同士が、お互いの個性や考え方、表現の仕方などを認め合ったり、お互いに長所（得意）を生かして協力したり、短所（苦手）を補ったり、時には不安や悩みに寄り添ったりすることができるような良好な人間関係を構築するために、平素から、協同学習やライフスキル教育などの取組の充実を図る必要があります。

このハンドブックは、こうした取組の基盤となる学級経営について、

「学級経営の計画とその実践の評価・改善」

「学　級　活　動」

「教 室 環 境 づ く り」

「保 護 者 と の 連 携」

といった視点から、基本的な考え方や留意点、具体的な取組事例などをまとめたものです。

計画、実践に当たって、随時活用してください。

学級経営の計画と その実践の評価・改善

学級経営とは、一人ひとりの児童生徒のよりよい成長を目指し、学級経営の基本方針の下に、学級での様々な教育活動の取組の成果が上がるよう諸条件を整備し、運営していくことです。また、学級は、教師と児童生徒、児童生徒相互の認め支え合う関係の中で創り上げられていくものです。

認め支え合う学級を実現するためには、学級内の児童生徒の長所（得意）に目を向け、学級経営目標の実現に向けて児童生徒の長所（得意）を生かした取組を行うとともに、教師が学級全体の成長や個々の児童生徒の成長を捉え、みんなで共有し、一人ひとりが存在感を実感できるようにすることが大切です。

これらを意図的、計画的に行うためには、次のページの「学級づくりシート」を用いて、「PDCA サイクル」に基づき、
学級経営における取組の計画 Plan を立て、
実践（実行）Do し、
定期的に振り返って実践の評価 Check・改善 Action をしていきましょう。

あわせて、取組を計画したり、実践したことを評価・改善したりする際には、学級全体や個々の児童生徒の実態を正しく把握することが大切です。
このことにより、課題が明確になり、より適切な取組を計画・実践することができるようになります。

学級づくりシート（例）　第　学年　組　　担任（　　）

学級内の児童生徒の長所（得意）と短所（苦手）を把握します。その際、短所（苦手）ばかりではなく、長所（得意）に目を向けることが大切です。

学校教育目標
学年目標 学校教育目標を踏まえ、学年でどのような児童生徒を育てたいか、目標を立てましょう。
学級経営目標 学年目標を踏まえ、学級でどのような児童生徒を育てたいか、教師の視点で目標を立てましょう。

学級内の児童生徒の長所（得意）と短所（苦手）

	長所（得意）	短所（苦手）
児童生徒A	周囲を気遣い、友達に声をかけることができる	自分に自信がない発言をすることがある
児童生徒B	ルールや決まりを守ることができる	自分の判断で行動することが苦手
児童生徒C	周りに流されず、集中して取り組むことができる	自分の世界に入り込んでしまい、全体を見ることができないときがある
児童生徒D	自分の意見を堂々と発言することができる	友達の意見に耳を傾けないことがある

４月時点で把握していることに加え、学級で過ごす中でわかってきたことについて、整理していきましょう。

取組を計画するため、学級全体や個々の児童生徒の現状と課題を把握することが重要です。

学級づくりでは、「仕組みづくり」と「人間関係づくり」のための取組が基本となります。

		仕組みづくり	人間関係づくり
4月 年度初めの現状と課題から具体的取組を考える	現状と課題	（例） 自分の思いを伝えることはできるが、周りの状況や友達のことを考えて、行動することが難しい。	（例） 人間関係が偏っており、普段関わりが少ない人とは、話合い活動をすることが難しい。
	5月までの取組	（例） 周りの状況や友達のことを考えた言動をすることができるよう、学級で共通のグループ目標を設定し、毎週末に振り返りを行う。	（例） どのグループでも話合い活動が円滑に行われるよう、「話し方」「聞き方」のモデルを示す。
5月 年度初め1か月間の取組を振り返る	取組の成果と課題		
	10月までの取組		
10月 前期の取組を振り返る	取組の成果と課題		
	2月までの取組		
2月 学級納めに向けて見通しをもつ	取組の成果と課題		
	年度末までの取組		

課題を踏まえ、学級経営目標の達成に向けた取組を計画しましょう。その際、児童生徒の長所（得意）を取組に生かすことが大切です。

児童生徒の姿をもとに、取組の成果と課題を分析しましょう。その際、取組の成果や児童生徒の成長に目を向けましょう。また、学級経営目標に対する現在の達成状況を把握することが大切です。

学級全体の成長や、個々の児童生徒の成長をまとめ、次に繋げることが大切です。

学　級　活　動

児童生徒にとって、学校生活の基盤となる学級における児童生徒同士の関係は、学校生活そのものに大きな影響を与えることとなります。

ここでは、学級経営を行う上で重要となる学級活動に係り、代表的な取組である「学級開き（年度初め）」、「学級目標」、「ルールづくり」、「係・委員」、「班編成・班活動」などについて、工夫を凝らした実践例を紹介します。

① 学級開き（年度初め）

学級開きとは、教師と児童生徒、そして児童生徒同士の出会いの場であり、１年間の学級経営を左右する大切な活動です。児童生徒の４月当初の緊張や不安な気持ちが希望や期待へと変わっていくことを目指します。

学級開きのひと工夫

事例１　工夫次第で盛り上がるおもしろ自己紹介

児童生徒が互いに認め合う第一歩は自己紹介と言えるでしょう。名前だけでなく、ひと工夫した自己紹介は和やかな雰囲気をつくり出すものです。

◇　児童生徒の自己紹介の前に、教師自身が自己開示する姿勢が大切です。
◇　共感的に聴き合う姿勢や話すことが苦手な児童生徒への配慮も必要です。

（例）他己紹介
ペア（２人組）を作って、まず簡単な自己紹介をし合います。
次に、ペアの相手のことをみんなに紹介します。

◇　全員がペア（または３人組）となるように配慮します。

わたしのペアは、
〇〇さんと言います。
好きな食べ物は〇〇〇〇で、
嫌いな食べ物は
〇〇〇〇だそうです。

事例２　目指す学級について、児童生徒自身が考える機会をつくる学級通信

年度当初の学級活動は、教師と児童生徒、児童生徒同士の出会いの場です。そこで配付する最初の学級通信では、教師が目指す学級像を明確に示します。

それを読んだ児童生徒自身が、どうすれば、考え方や関心、意見の違い等を理解した上で認め合い、互いのよさを生かすような関係をつくることができるのか、考えるよう促します。

また、保護者に目指す学級像について伝えることもできます。

事例３　児童生徒同士の出会いを促すアイス・ブレイク

年度当初、児童生徒は新しい学校生活を緊張しながら迎えています。

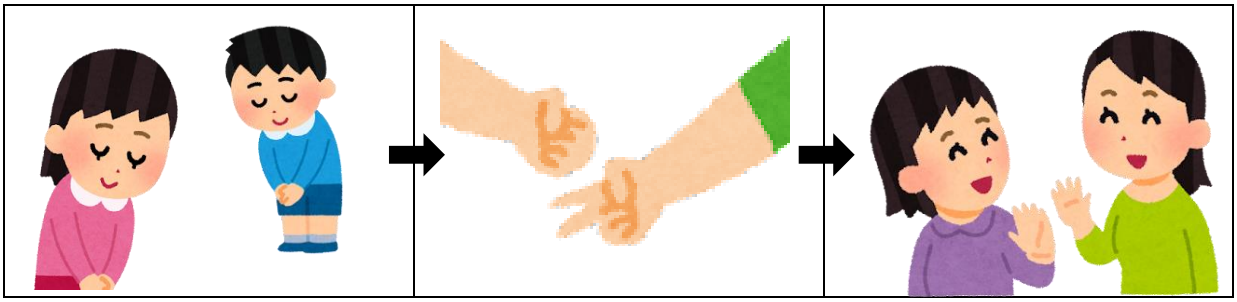
そこで、簡単なアイス・ブレイク（対人的な緊張緩和の手法）で、児童生徒同士の円滑な人間関係の形成を促します。

（例）あいさつゲーム

制限時間内に何人とあいさつできるか、というゲームです。

最初は言葉でのあいさつだけ、２回目はジャンケンなど簡単なコミュニケーションを加えて、最後は別れ際に笑顔で手を振る、などといった工夫も、雰囲気を盛り上げるためには大切です。

◇　教師も積極的に参加して、他者とコミュニケーションがとりづらい児童生徒に教師自身があいさつしたり、その児童生徒にあいさつするよう他の児童生徒を促したりするなどの支援をしてみましょう。



Point

欠席している児童生徒、例えば長期入院をしている児童生徒も学級の一員である、と感じられるように進めることが大切です。

また、特別支援学級に在籍する児童生徒の交流学級となっていることもあるでしょう。

学級開きの際、事前に時間割の調整を行うと、特別支援学級の児童生徒が参加しやすくなります。参加できない場合は、例えば、「事前に手紙や写真を預かっておく」、「Web で参加する」等の工夫が考えられます。

お互いに存在を意識し、認め合える工夫ができるようにしましょう。

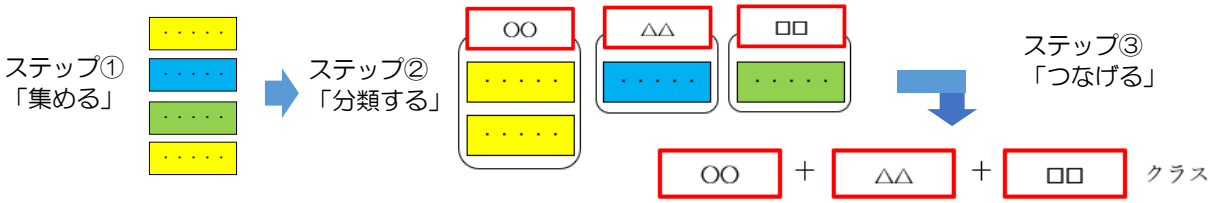
② 学 級 目 標

学級目標は、学級が目指す姿であり、教師は、学校や学年の目標と関連付けたり、目指す学級の姿を示したりした上で、児童生徒が自分たちで目標をしっかりと定め、反省と改善を繰り返しながら追求できるようにします。

学級目標のひと工夫

事例１　３ステップでつくる学級目標

ステップ①「集 め る」：児童生徒から「どんな学級にしたいか」の意見を集めます。
ステップ②「分類する」：児童生徒から出た意見を分類して、見出しをつけます。
ステップ③「つなげる」：見出しをつなぎ合わせて、学級目標にします。



◇　学校や学年の目標や教師の思いや願いを伝え、目指す学級の姿をクラス全員で共有した上で、学級目標を考えることで、学級経営目標との関連を図ることができます。

事例２　みんなで作る、学級全員が団結した掲示物

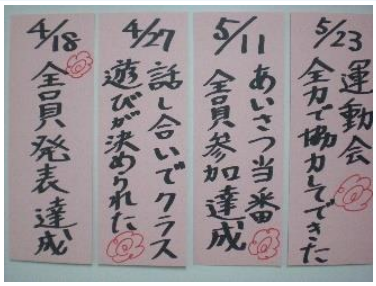
学級の児童生徒全員が話し合い、合意形成して決定した学級目標は、できれば１年間掲示して、常に目に止まるようにしておきたいものです。

例えば、学級目標の掲示を作成する際には、一人ひとりが、学級目標の１文字１文字をデザインし、素敵な掲示物にしてみましょう。文字数が足りない場合は、周辺の空白部分に色を自由に塗ったり、模様をつけたりする方法も考えられます。

完成した掲示物は、正に全員で作り上げた学級目標となり、児童生徒たちをよりよい学級集団へと導いてくれるでしょう。

事例３　達成したことを学級内に掲示する

学級目標に沿って、学級全員で達成したことを短冊に書いて学級内に掲示し、一人ひとりの努力や積み重ねを視覚化することで、自己の存在感や互いを認め支え合う雰囲気を醸成します。



事例４　年度途中に振り返り、定期的に更新する

学級目標は１年間同じものでなければいけないわけではありません。目標が達成できたかどうか、年度途中に振り返り、その進捗状況を踏まえて、新しい目標に更新するのもよいでしょう。

◇　達成できる難易度の目標とすること。
◇　達成できたかどうか、児童生徒自身が判断できる目標とすること。

③ ルールづくり

学級活動を行っていく上では、児童生徒が安心して生活できるよう一定の秩序を保つことも大切です。

教師は、学級活動を進めるに当たってのルールを提示したり、児童生徒同士がルールについて話し合うようにしたりすることで、全員がそれらのルールについて理解し、定着するようにします。

Point

児童生徒がルールを守れなかった時、守れなかったことを注意するのではなく、「どこまでは（何は）できていたか」、「どうすればできるか」などを教師が一緒に振り返ってみることが大切です。

そうすることで、行動の課題を確認しながら、できたことに目を向け、褒めることができます。

「できなかった」で終わらせないようにすることで、次回への意欲を高めることに繋がります。

また、課題への具体的な対応方法や次の見通しがより明確になります。

ルールづくりのひと工夫

事例１　ブレない・変えない　基本のルールの提示

児童生徒が安心して過ごすことができる学級にするためには、まずは基本のルールを教師から提示することが必要です。例えば、「人を傷付けないよう、大切にします」や「授業と休憩時間とをしっかりと切り替えます」などが考えられます。

◇　１～３つ程度に絞ることで意識しやすくなります。
◇　できるだけ短く、覚えやすい言葉で伝えましょう。
◇　定期的に、または場面を捉えて、繰り返し指導することで定着を図りましょう。
◇　基本のルールを基にどのように運用していくか、児童生徒同士が話し合う機会をつくりましょう。

基本のルールを提示したら、まずは、教師が率先してルールを守る姿勢を示しましょう。

例えば、「人を傷付けないよう、大切にします」と設定したら、教師がそうすることは勿論、児童生徒が人を傷付けるような言動をしたら、タイミングを逃さずに声をかけ、このページ中段のコラム「Point」を参考にして、適切に指導することが大切です。

また、「授業と休憩時間とをしっかり切り替えます」と設定したなら、教師は、チャイムと同時に授業を始め、チャイムと同時に授業を終えるようにする必要があります。

事例２　できた時には「褒める」、できなかった時には「考えさせる」指導を！

学校生活や社会生活の中では、多くのルールがあります。ルールは、「守って当たり前」ではなく、できた時には褒めることで定着を図りましょう。

児童生徒が意識してルールを守れた時には、その場面や機会を捉え、積極的に褒めていくようにしましょう。一方、ルールを守れなかった時には、まずは、どうしてそのルールが存在しているのか考えさせる言葉かけを心がけましょう。

また、新たなルールが必要になった時は、児童生徒同士でルールを考えられるようにします。自分たちで考えたルールがうまくいかない時には、さらにそのルールの見直しを児童生徒に働きかけましょう。

教師も根気強さが大切です。

事例３　「議題ボックス」で学級の課題を提案

学級や学校における生活上の諸課題や、集団をよりよくするためのアイデア等、学級で話し合いたい議案を思いついたら、「議題ボックス」に提出します。

学級の代表は、提出されたアイデアを学級会での議題として扱い、学級全体で話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりします。

事例４　KJ 法で目指す学級のすがたや課題を書き出して、分類し、まとめる

ふせん程度の大きさの紙に、目指す学級のすがたや、現在抱えている課題を思いつく限り書き出します。それを班、あるいはグループで協働して分類し、効果的な解決方法の提案や取組を話し合って合意形成します。

このような方法を「KJ 法」といいます。

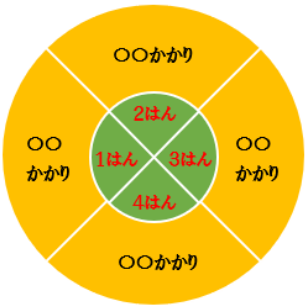
④ 係 ・ 委 員

係活動や委員会活動は、学級生活や学校生活の充実と向上のために、児童生徒が創意工夫して取り組むものです。

教師は、児童生徒が自分たちにできることを話し合って決定し、役割分担することにより、自発的、自治的な活動となるようにします。

係・委員のひと工夫

事例１　いろいろな係を経験させたい入門期に週替わり係はいかが？



年度当初など、どのような係が学級に必要かを考えたり、児童生徒が係活動についてイメージを持てなかったりするときには、他の当番活動と同様に、週替わりでいろいろな係活動を体験できるようにしてみてはどうでしょう。

係活動への理解が深まってから、必要な係を自分たちで考えたり、１つの係を工夫・改善しながら責任をもって取り組んだりしていくなど、ステップアップしていくことも考えられます。

ただし、短期間で役割が変わることに対応できない児童生徒がいるかもしれないということにも留意しましょう。（このページ下部のコラム「Point」参照）

事例２　児童生徒が決める、「学級にほしい、こんな係！」

学級に必要な係は教師から提示することも必要ですが、時には児童生徒自身が学級の現状を振り返り、今、学級に必要な係活動は何か、考えるようにするのもよいでしょう。

（例）「今月の学校生活目標は『着ベルをしよう』だ。」→「着ベル推進係を作ろう！」
　　「いよいよ、待ちに待った体育祭が来月に行われる。」→「学級応援団係を作ろう！」

事例３　委員決めは事前の準備から

委員会の委員決めは、学級のリーダーを決める上で非常に重要ですが、中には、立候補したいが一歩踏み出す勇気が出ず、なかなか言い出せない児童生徒もいるかもしれません。

そこで、学級の委員決めは事前に日にちと時間を児童生徒に伝え、意思決定できるようにしておくと良いでしょう。さらに、事前実施のアンケートで何委員会になりたいか、希望を聞いておくのも効果的です。立候補することに不安を訴える生徒がいたら、しっかりと不安を受け止め、あたたかい言葉などで、そっと背中を押すことも必要かもしれません。

Point

活動内容や手順、担当場所のイメージが不明確だと取り組みにくいという児童生徒がいます。

また、本人はやったつもりなのに、周囲の期待する内容とは差がある、ということがあります。

そのようなときには、視覚的に、手順や分担、望ましい姿（ゴールイメージ）を具体的に示すようにします。

また、短期間で役割が変わるということに対応できない児童生徒もいます。

係を一定期間固定し、自信をもって取り組めるようにすることも方法の一つです。

⑤ 班 編 成 ・ 班 活 動

学級活動では、少人数の班単位で活動することが多くあります。

教師は、学級経営目標の達成に向け、児童生徒が班活動を通じて個性や考え方などを認め合ったり、互いの長所（得意）を生かして支え合ったりする経験を重ねることができるようにします。

班編成をするタイミングは、「より多くの児童生徒との関わりをもたせるために毎月行う」という視点だけでなく、「文化祭に向けてがんばる班」、「修学旅行に向けてがんばる班」、「テストに向けて勉強をがんばる班」など、年間の行事予定に合わせて目標達成のために一緒にがんばるメンバーという視点をもって班編成・班活動を行うと、より効果的です。

Point

長い期間欠席をしている児童生徒も所属意識をもつことができるようにすることが大切です。

また、特別支援学級に在籍する児童生徒が交流学級にも所属意識をもつことができるようにしましょう。

班編成・班活動のひと工夫

事例１　班編成あれこれ

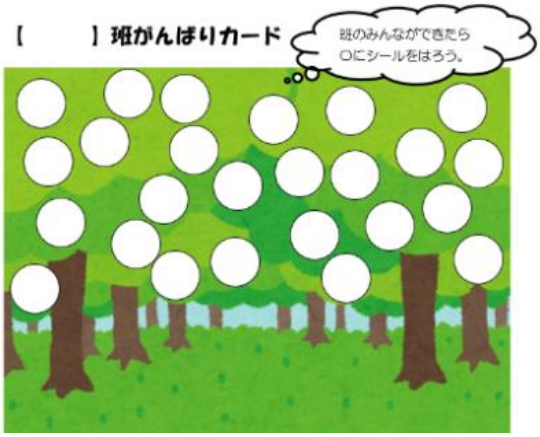
① 教師が決める

児童生徒の人間関係等を考慮し、席の配置や班編成を教師があらかじめ決め、学級全員に発表します。

② リーダーが決める

班のリーダー（班長）を募集し、リーダーの話合いによって、班のメンバーを決定します。その際、教師は、学級内の人間関係をしっかり把握した上で、メンバーを決める話合いの場に必ず同席することがトラブルの未然防止のポイントになります。

事例２　カードを使った班活動



① 班で協力！がんばりカード

班のみんなで協力して頑張ったことをカードやシールで肯定的に評価していく方法があります。

学級で決めた１日のめあてを班の全員が達成できたときや班で決めた目標が達成できた日に「がんばりカード」にシールを貼っていくことで、班のメンバーが互いに声をかけ合ったり、助け合ったりする姿が期待できます。

ただし、シールを貼ることが目的となり、班が強制的な雰囲気にならないよう気を付けることも必要です。

② 班替えの時に、班員に「ありがとうカード」を贈る

期間の長短はあれど、学校生活を共にした仲間である班員に対して感謝の意を込めて「ありがとうカード」を作成します。

どんな小さなことでも構いません。班員に対して、あたたかく、優しい気持ちになるような感謝の言葉を書いたカードを作ることで、他者への尊重と思いやりを深めてよりよい人間関係を形成する態度が養われます。

⑥ その他

その他、学級活動では、話合い活動、朝の会・帰りの会（SHR）、休憩時間など、様々な場面を捉えて自己存在感や自己有用感を感じることができるよう工夫することで、安心して過ごすことができる環境をつくることができます。

その他のひと工夫

事例１　帰りの会で「がんばったところみつけ！」

帰りの会で１日の頑張りを振り返る場面を設定することで、互いのよさを認め合う貴重な活動になります。

（例）・日直の進行により、頑張った友達を紹介し合う。
・班のリーダーの進行により、班の中で頑張ったことなどを振り返る。
・日直がその日の「がんばった賞」を紹介する。

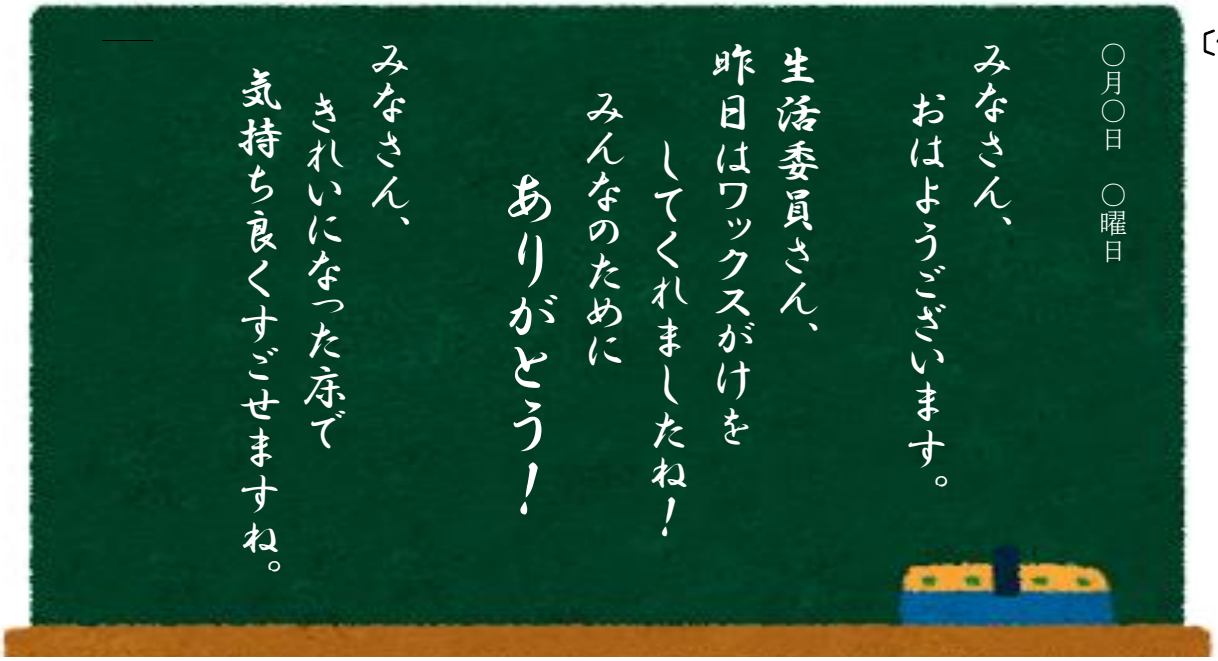
◇　頑張ったことや助けられたこと、よかったことなど肯定的な交流場面にしましょう。

◇　ある一定期間内に全員が認められる場面を設定できるように、メモを取るなどして認め合う活動を工夫したりしましょう。

事例２　黒板に児童生徒を迎えるメッセージを書く

黒板に、教師から児童生徒に対してメッセージを書きます。
特に、児童生徒を褒める内容や、児童生徒が学級や学校のためにした活動内容を書くと、当該児童生徒は自己存在感を感じることができるとともに、他の児童生徒も果たすべき役割を確認することができます。（ただし、特定の児童生徒に偏らないように気を付けましょう。）

〔例〕



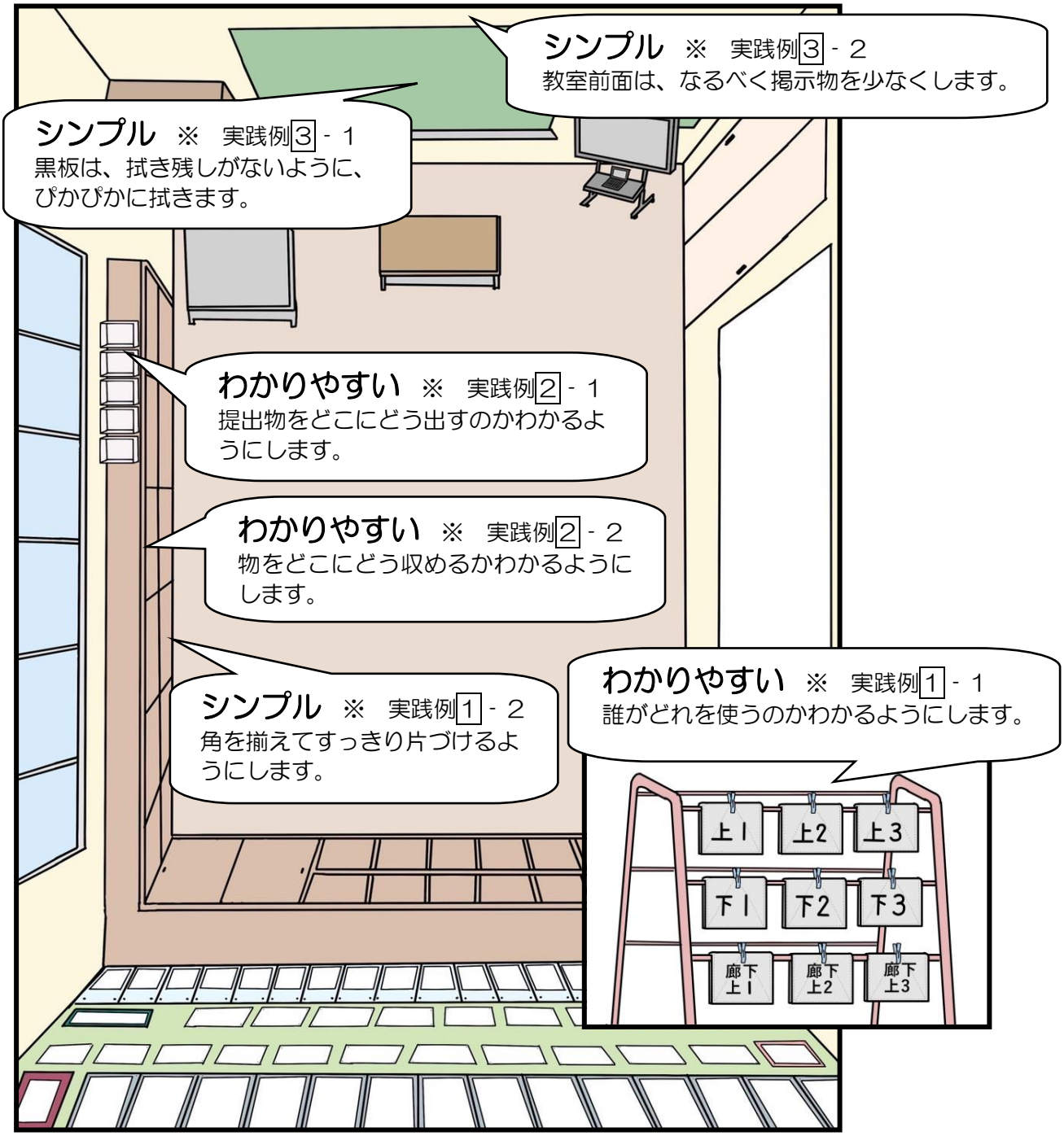
教室環境づくり

支持的風土の醸成された学級づくりは、「仕組みづくり」と「人間関係づくり」のための取組が基本となります。その「仕組みづくり」「人間関係づくり」の観点から、教室環境づくりについて、具体的な実践例を通して、基本的な考え方や留意点等を紹介します。

① 「シンプル」で「わかりやすい」教室環境づくり

「シンプル」で「わかりやすい」教室環境になるように「仕組みづくり」をすることで、児童生徒は、落ち着いて学校生活を送ることができるようになり、学習等に集中しやすくなったり、自分で進んで活動できるようになったりします。

⑴ シンプルな教室環境……視野に入ると気になる刺激が少なく、すっきりしている教室環境
⑵ わかりやすい教室環境……何をどうすればよいかわかる教室環境



やってみよう！実践例 1

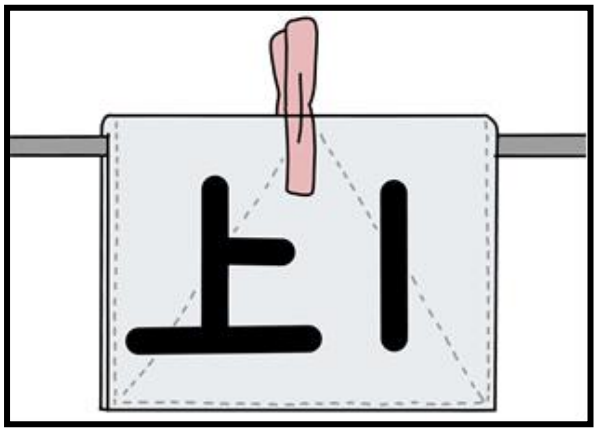
わかりやすい

1　そうじ道具へのひと工夫

「雑巾を干す時は、角を揃えて、洗濯ばさみでとめる」ということは、多くの先生方が実践されています。しかし「角を揃えよう！」といくら言っても、揃わないことがあります。

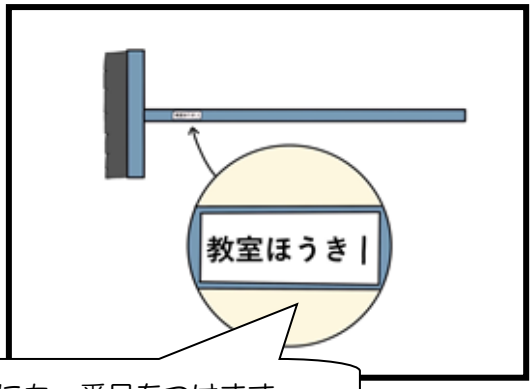
そんなときは……**「雑巾１枚１枚に番号をつける！（雑巾番号作戦）」**

「誰がどの雑巾を使っているのか」を明確にすることで、その雑巾への「責任」が生まれ、角を揃える意識が芽生えることに繋がります。また、「上雑巾の１番は〇〇さん」と決めることで、上雑巾の１番の角が揃っているとき、「〇〇さん、角を揃えててえらいね！」と言葉をかけることもできます。自分がどの道具を使うのかわかりやすくなると、進んで活動できるようにもなります。



洗濯ばさみにも、番号をつけると効果的です。（洗濯ばさみにビニールテープをつけています。）

「雑巾番号作戦」の応用編として、色々な物に番号をつけ、児童生徒が使う道具を明確にするとその物に対する責任が生まれます。片づけをきちんとする手助けにもなり、教室全体がすっきりします。



ほうきにも、番号をつけます。

そうじ班（４月）

1班	〇〇さん	〇〇さん	〇〇さん	〇〇さん
	教室 ほうき1	教室 ほうき2	教室 上ぞうきん1	教室 上ぞうきん2
2班	〇〇さん	〇〇さん	〇〇さん	〇〇さん
	児童会室 上ぞうきん1	児童会室 下ぞうきん1	児童会室 ほうき1	児童会室 ほうき2
3班	〇〇さん	〇〇さん	〇〇さん	〇〇さん
	トイレ 手洗い場1	トイレ 手洗い場2	くつ箱 ミニほうき1	くつ箱 ミニほうき2

掃除場所を決めるときに、誰がどの雑巾・ほうきを使うか決めておきます。

シンプル

2　合言葉は「角を揃えよう」

雑巾の角だけでなく、色々な物も「角を揃えよう」と言葉かけします。たくさんのことを言うのではなく「角を揃える」と言うだけです。雑巾もその一つということです。角を揃えると、教室全体がすっきりします。

画板の角も、合言葉の「角を揃えよう」と言って角を揃えるように言葉をかけます。

ノートの角も！

やってみよう！実践例 2

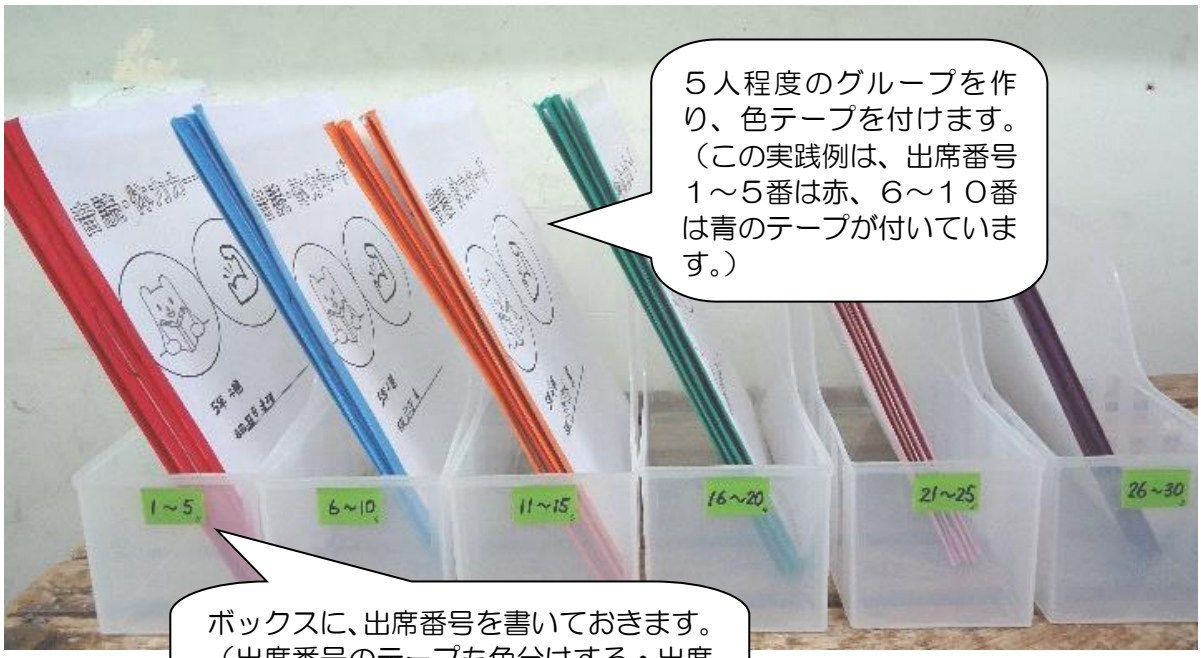
わかりやすい

1　提出物の出し方

宿題や課題、授業ノート、保護者アンケート等、児童生徒は、日々、たくさんのものを提出します。全員が提出したのかチェックするのは、大変です。

そんなときは……**「全員が一目でわかるシステム作り！（色別・ボックス作戦）」**

ノート等に色別のテープを付け、決まったボックスに提出するようにします。誰がどこに提出するかを明確にすることで、児童生徒は自分でどこに出せばよいか判断し、行動できます。また、教師にとって提出していない児童生徒がわかりやすくなり、個人個人に「〇〇さん、提出できていないよ。」と言葉をかけることができます。



５人程度のグループを作り、色テープを付けます。（この実践例は、出席番号１～５番は赤、６～１０番は青のテープが付いています。）

ボックスに、出席番号を書いておきます。（出席番号のテープも色分けする・出席番号を一つずつ「１・２・３・４・５」のように書くと更にわかりやすい！）

※　棚にラベリングすることも、物をどこにどう収めるかわかる手助けになります。

わかりやすい

2　合言葉は「〇〇さんは、赤！（又は青、オレンジ……）」

提出物だけでなく、「その子・そのグループ」の色を決め、いつも同じ色にすると、わかりやすくなります。

鍵盤ハーモニカ等にもノート等と同じ色のテープを付けます。

年度の初めに、どのチームかわかりづらい児童生徒がいる場合、ビブスの色も、ノート等に付けているテープと同じ色にするとわかりやすくなります。

やってみよう！実践例 3

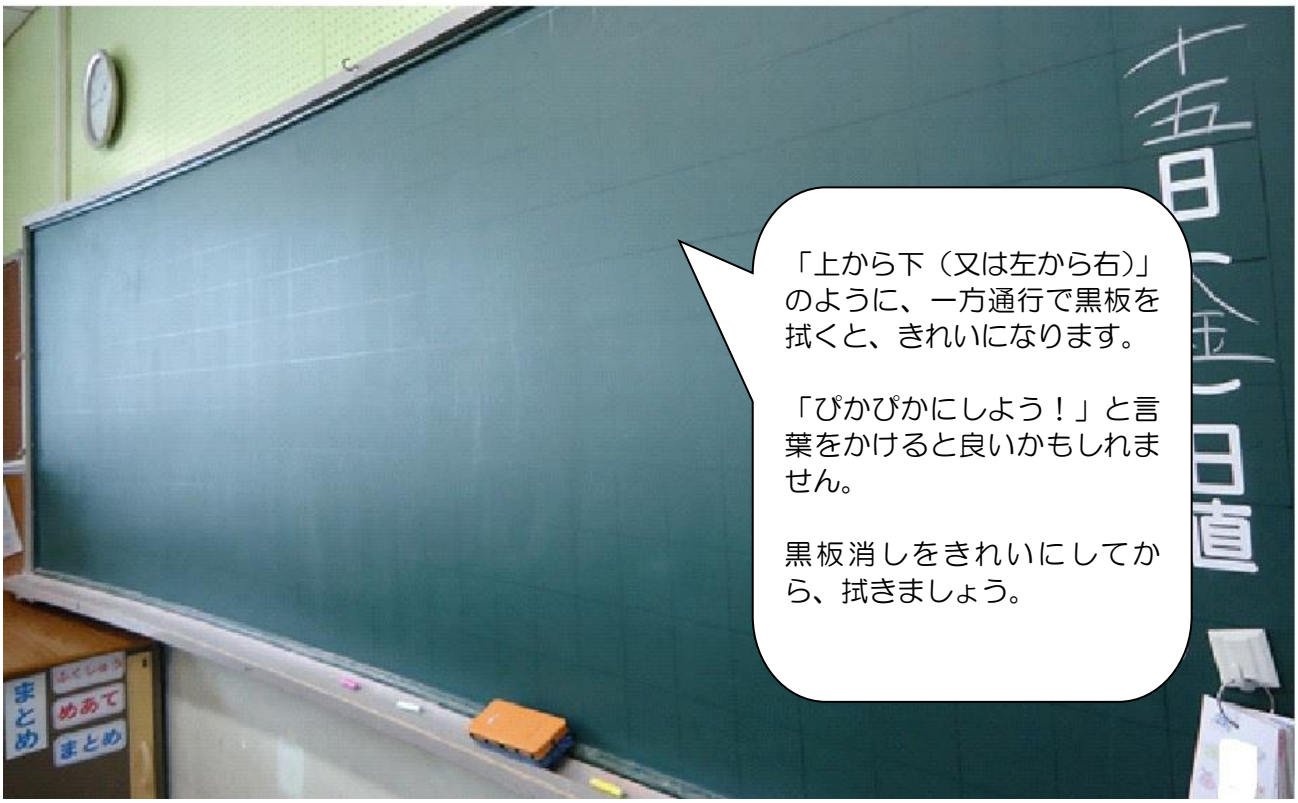
シンプル

1　黒板の拭き方

前の時間に書かれた文字が残っていると、それが気になって授業に集中できない児童生徒がいるかもしれません。（その児童生徒の頭の中は「あの字は『ぬ』かな？『め』かな？うーん、『め』っぽいぞ。」という、授業とは関係ないことでいっぱいかもしれません。）また、授業に必要のない物が黒板にあると、同じように気になる児童生徒がいるかもしれません。

そんなときは……**「必要な物だけがある黒板にする！（すっきり作戦）」**

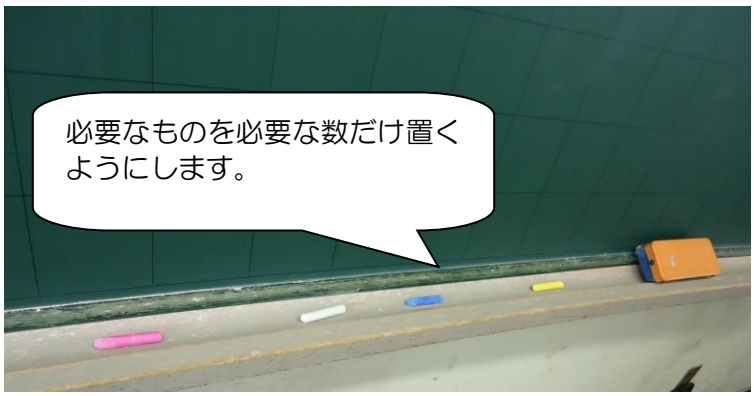
授業後に黒板をきれいにする際、文字等が残らないようにします。また、「今している授業」とは関係のない物は、なるべく黒板には無いようにします。

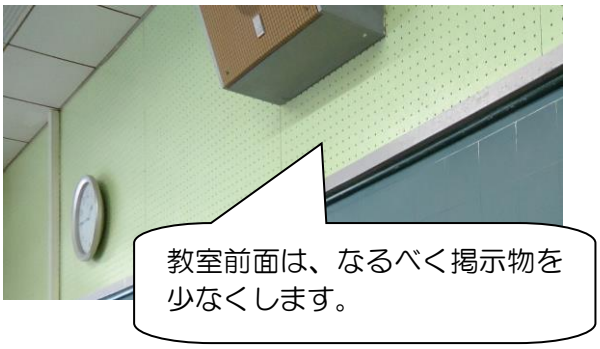


シンプル

2　合言葉は「すっきり、ぴかぴか」

必要な物だけ残し、不必要な物は、黒板（又は教室前面）から無くします。



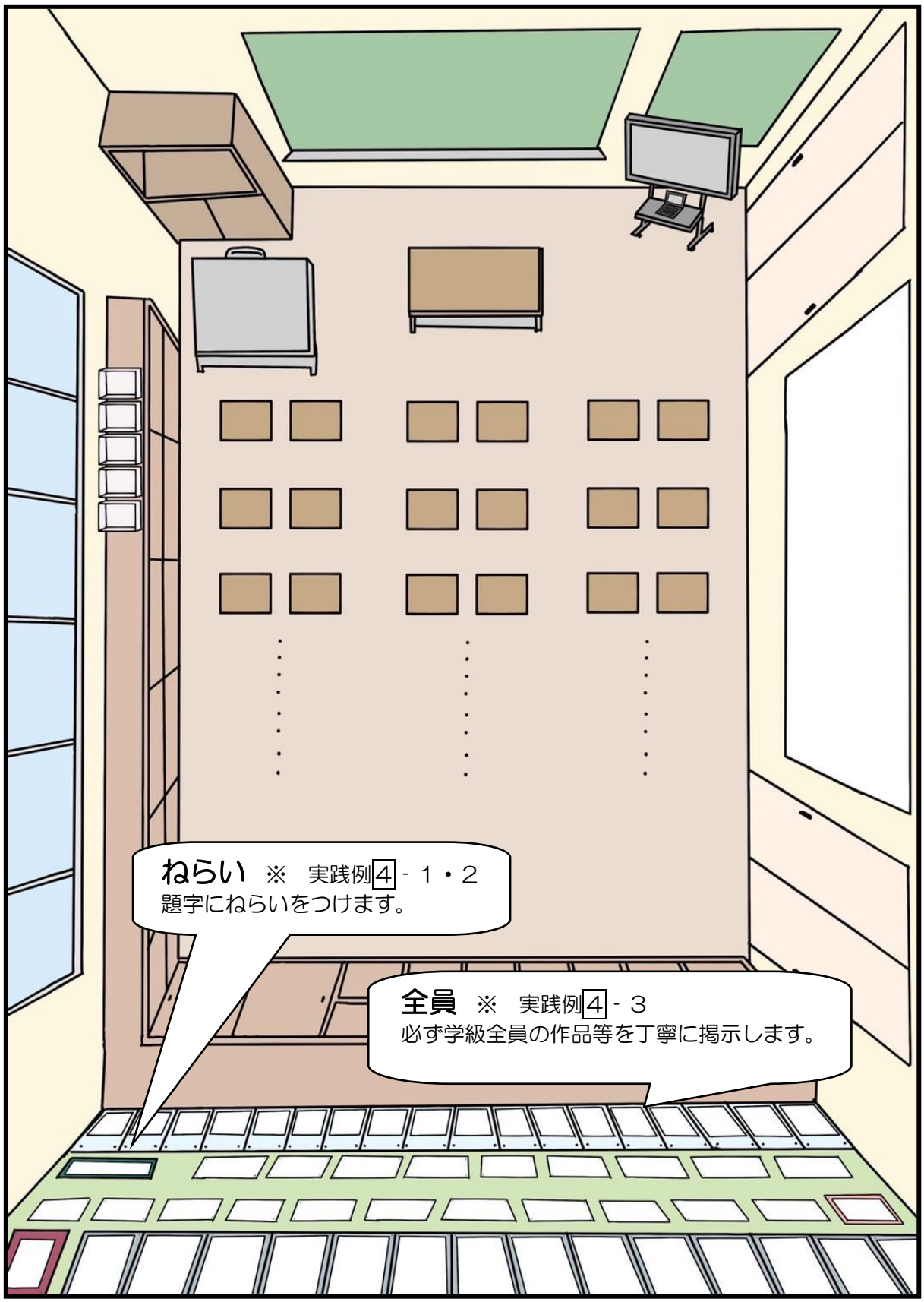


② 「ねらい」がわかり「全員」が大切にされている教室環境づくり

掲示の「ねらい」がわかる教室環境にすることで、児童生徒同士の褒め合いの質が向上します。褒め合うことや「全員」が大切にされていると感じられることは、「人間関係づくり」の手助けとなります。

⑴ ねらいがわかる教室環境……一つ一つの掲示について、何を目指しているかがわかる教室環境

⑵ 全員が大切にされている教室環境……全員の作品が丁寧に掲示されている教室環境



やってみよう！実践例 4

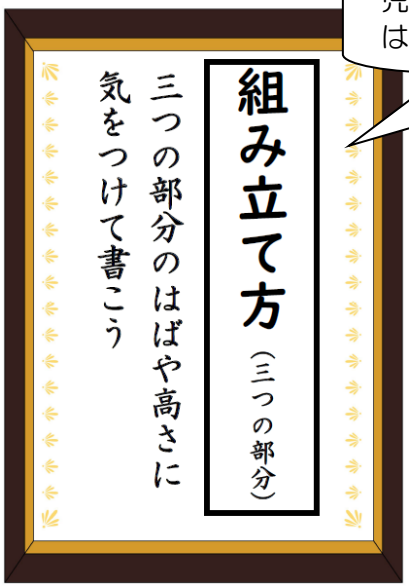
ねらい

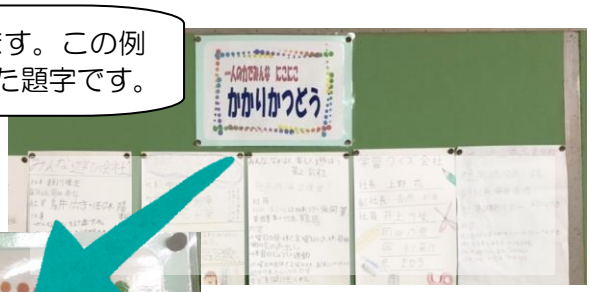
1　掲示物の題字

児童生徒の作品やワークシートを掲示した際、それを見て児童生徒は様々な感想をもちます。「〇〇くんの作品のここが素敵だな、今度やってみよう！」「〇〇さんは、こういう考えなんだな、私の考えと似ているな。（同じだな。）」等……。

ほんの少しの工夫で、この児童生徒の感想の内容を充実させることができます。それは……**「題字にねらいをつける！（ねらいに沿った褒め合い作戦）」**です。

児童生徒の作品の横に掲示します。この例は、書写の「湖」の掲示に添えた題字です。





特別活動に関係する題字にもねらいをつけます。

こうすることで、「〇〇さんの文字は上手だな。」という漠然とした感想から、「〇〇さんの湖の文字は、高さに気を付けていて良いな。」という感想がもてるようになります。作品を見る視点が焦点化されて感想の内容が充実し、褒め合いの質が向上します。また、その掲示がある間、「文字は、組み立て方を考えながら書くんだな。」という学習の振り返りもできます。

特別活動に関係する題字にもねらいをつけることで、「なぜ、その活動をしているか。」がわかりやすくなります。係活動を「しなさい。」と言われているからするのではなく、「みんながにこにこして生活していくためにやるんだ！」という気持ちをもって活動するようになります。そうすることで、「進んで係活動をしている友達」を見つけ、褒め合うことに繋がります。

題字そのものに、ねらいを入れた掲示です。「がんばりのき」とすることで、「みんなで頑張って、足跡を残していく」というねらいを表しています。そうすることで、児童生徒は「頑張っている友達」を探すようになり、褒め合うことに繋がります。

ねらい

２　合言葉は「明確に」

教師が学習や活動のねらいを明確に意識していることはもちろん、児童生徒も、「なぜ・何の目的で」その学習や活動をしているのかわかっていることが大切です。授業中だけでなく、掲示物にその学習や活動のねらいを示すことで、学習や活動の質も上がり、また、「ねらいに沿った学習・活動をしている友達」を褒め合うことに繋がります。

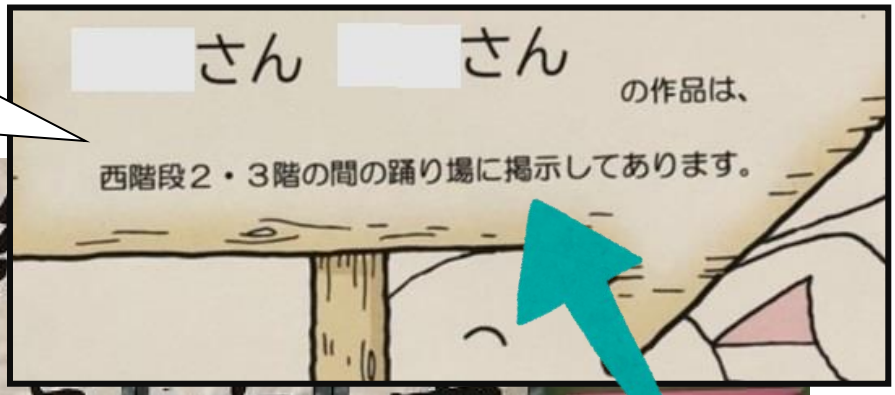
大休憩に取り組むことにも、題字にねらいをつけます。
勝敗が大切なのではない、というメッセージも伝えることができます。

全員

３　作品等の掲示

児童生徒の作品等を掲示する際、全員の作品が掲示されているか確認します。全員の作品が、丁寧に掲示されていることで、児童生徒は「自分が大切にされている」「友達も大切にされている」という気持ちをもちます。

一部の児童生徒の作品等を違う場所に掲示するときは、掲示してある場所を示します。（保護者等にもわかりやすくなります。）



作品等の全ての角を画鋲で留めることで、掲示中、作品が傷むことを防ぎます。（全ての角を留めないと、作品等が破れやすくなります。）

保護者との連携

学校が、保護者との連携により、児童生徒の学校での状況の把握に加え、家庭における生活状況を的確に把握（児童生徒理解）し、保護者への説明責任（開かれた学校づくり）を果たし、学校・学級経営目標や指導方針等について保護者に支持してもらうことで、学級における「支持的風土」の醸成をより促進させることが期待できます。

したがって、日頃から保護者との関わりを深め、互いに良きパートナーとして、それぞれの役割を分担する中で、連携が形式的にならないよう心がけ、信頼関係を築いていくことが大切です。

Point

保護者にどうしても連絡しなければならない場合というのは、「忘れ物の連絡」「トラブルに係る報告」など、児童生徒の課題に関わることが多く、教師は、こういった連絡はなるべく避けたい、後回しにしたい、と思うことがあるかもしれません。保護者も、教師からの連絡が、良くない内容ばかりでは、学校からの連絡にネガティブな印象をもたれてしまうかもしれません。

そこで、「今日、〇〇さん、周りの友達と一緒に作品を完成させたんですよ。お母さんに見せたいって言ってましたよ。」など、児童生徒の好ましい様子や変化など機をとらえて伝えることで、よりよい関係をつくるきっかけとすることができます。

こうした良好な関係があれば、児童生徒の課題に関する報告も、その後の適切な対応に繋がります。

保護者との連携には、具体的に次のような方法があります。

〔定期的な連絡〕
学級懇談会、個人懇談、授業参観、
通知表、学級（学年）通信、
連絡ノート　など

〔不定期な連絡〕
家庭訪問、電話連絡、
欠席・遅刻・早退した日の連絡、手紙、
連絡ノート、地域懇談会　など

ここでは、「①学級懇談会」と「②家庭訪問」についてまとめます。

① 学級懇談会

学級懇談会は、学校経営、学級経営等の学校の教育活動の目的などを伝え、理解してもらうことがねらいの１つです。そのためには、教師と保護者との相互理解と協力を深めるような話合いが行われるように努めることが大切です。

また、学級懇談会は、教師が学級の様子について説明する機会であることはもとより、保護者同士が話し合う場面を設定することで、保護者と児童生徒とのいろいろな関わり方などを参考にする貴重な機会ともなります。

なお、学級懇談会は、定期的に開催する場合と、必要があって開催する場合とがあります。

懇談会実施前の確認

⑴　学校全体や学年全体の取組の説明については、伝える内容を事前に統一しておきます。
⑵　懇談会を開く目的を明確にし、開く時期、回数を精査します。
⑶　伝えるだけではなく、意見を聞く機会を設けます。
　「携帯電話の使用のルール」「家庭学習の時間」など、テーマを決めておいたり、話しやすい雰囲気を作るためにアイス・ブレイクなどをしたりすることも効果的です。
⑷　懇談会の出席者を増やすために、「何を聞きたいのか」「何を話し合いたいのか」を、事前に、アンケートなどで聞くことも効果的です。

② 家庭訪問

　家庭訪問は、学校と保護者との連絡を通して相互理解を図り、協力体制をつくることで、教育的効果を上げることがねらいです。
　そのためには、家庭での児童生徒の状況を把握すると同時に、学校生活の様子を伝えるなど、学校教育について保護者の理解を深めることが大切です。
　なお、家庭訪問には、定期的・計画的に実施する場合と、病気・事故などに係る緊急の訪問、学校での様子や生徒指導に係る報告など、必要に応じて、実施する場合があります。また、数日間（３日程度）欠席が続いた場合などは、電話連絡ではなく、短時間であっても家庭訪問を行うことが、児童生徒のみならず保護者との信頼関係を築く上でも効果的です。

家庭訪問実施前の確認

⑴　緊急的な場合を除き、あらかじめ訪問の日時を連絡し、了解を得ます。
⑵　何を目的とした訪問なのか（思いを聴く、報告、家庭での様子を知るなど）を明確にし、どのように話をするのかをあらかじめ整理して訪問することが大切です。
⑶　傾聴の姿勢を大切にし、保護者との信頼関係を形成していきます。
⑷　個人のプライバシーを尊重し、指導上必要な事項のみを聞くようにします。家庭訪問によって知り得た秘密は、絶対に校外や部外者に出ないようにします。
　また、家庭訪問であっても、個人情報を持ち出さないことを原則とし、やむを得ず個人情報を持ち出す場合は、校長の許可を得ることとします。
⑸　保護者が前向きに考えることができるよう、課題を踏まえた上で、「こうすればもっとよくなる」など、今後に向けたプラス思考で話します。
⑹　緊急的な訪問や生徒指導に係る報告をするなどの場合には、状況に応じて、複数の教員で訪問したり、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーに同行してもらったりすることも検討します。

このハンドブックについての
お問合せ先

「学級経営の計画と その実践の評価・改善」に関することは

教育センター

「学級活動」に関することは

指導第一課・指導第二課

「教室環境づくり」に関することは

特別支援教育課

「保護者との連携」に関すること、その他ハンドブック全体に関することは

生徒指導課